

付 四隅突出型弥生墳丘墓二題

近藤義郎

1

本文での検討の結果が示すように、竹田8号墓が隅突出型すなわち四隅突出型弥生墳丘墓の一隅を残すものであることは、明らかである。もともと四隅突出型弥生墳丘墓は、山陰地方の弥生時代後期を特色づける墳墓型式とみられてきたが、最近になって中国背梁山脈の南側において、その明確な例が知られるようになってきた。庄原市田尻山1号、三次市矢谷、同じく三次市宗祐池西第1号がそれである。いずれも、備後北部に位置し、江の川沿いなどいくつかのルートで山陰わけても出雲に通じる地域であるため、山陰との関連の深さを単に示すものとして扱われがちであった。⁽¹⁾しかしここに述べようとする竹田8号弥生墳丘墓は、美作中枢部にほど近い、というよりその一部を構成する岡山県苫田郡鏡野町の一角に位置している。したがつてこの墳丘墓発見のもつ意義は、美作の歴史にとっても、きわめて大きいといわなければならない。

竹田8号弥生墳丘墓は、全体についての正確な規模形状は不明であるが、その一辺は14m、高さ約1.5mあり、平面形は方または長方形、残存する突出部はきわめて小さく、1mをややこえるにすぎない。また、島根県瑞穂町順庵原1号弥生墳丘墓の「周溝西南端列石」にいくぶん似た配石部分もみられる。僅か半分にも足りない墳丘残存部分に、14の土壙墓と小形の土器棺葬3、4がみられた。後者に使用された土器は、弥生時代後期初頭に属するもので、一部は鬼川市I式に併行するものと考えられる。多数の埋葬があるため、この時期は、本墳丘墓築造の時期を示すか、あるいは継続使用の一時点を示すかは明らかでないが、いずれにせよ、吉備の地域において特殊器台形土器・特殊壺形土器が出現する以前の築造であることにはまちがいない。

それに対し備後庄原市田尻山1号弥生墳丘墓は鬼川市IないしII式に相当する土器を出土し、上の竹田8号弥生墳丘墓とほぼ同時期ないし直後と推定される。墳丘は辺9.6×10.9mで低小、「各々辺は僅かながら弧状となり隅部が張り出す長方形を呈し」という。墳丘の裾は「10~20cm大の板石状の角礫の広口面を外に向けて縦位あるいは横位に使用してほぼ間断なく配列させて石列帯」をなす。そのほか斜面に貼石が部分的に残存している。裾の石列の石が10~20cmの小形の石であるのに対し、斜面の貼石が20~70cmと大きいのは貼石と石列との間隔の広狭は別として順庵原1号墳のいわゆる「棒状列石」と斜面の貼石との関係に似ている。四隅の張り出しは、顯著でなく、よく保存されている東隅でみるときわめて微弱である。しかし東突出部上

面に三枚の石を、その平らたい部分を上にして配置している点は、鳥取県倉吉市阿弥大寺弥生墳丘墓群の三基や順庵原1号墳丘墓の類似した状態を想わせるものがある。

宗祐池西第1号
(3)
墳丘墓は、「東西約10m、南北約5mの小形の」長方形四隅突出型墳丘墓で、いま北側と東側に貼石を残している。四隅の突出部は微弱であり、先の田尻山1号墳丘墓にみた小礫からなる石列はみられない。突出部のうち、南東と北西部のものは、その上に三、四の平石状のものがみえ、田尻山との共通性を示している。貼石の大きさは長さにして、約20～約60cmである。墳丘はきわめて低平で、

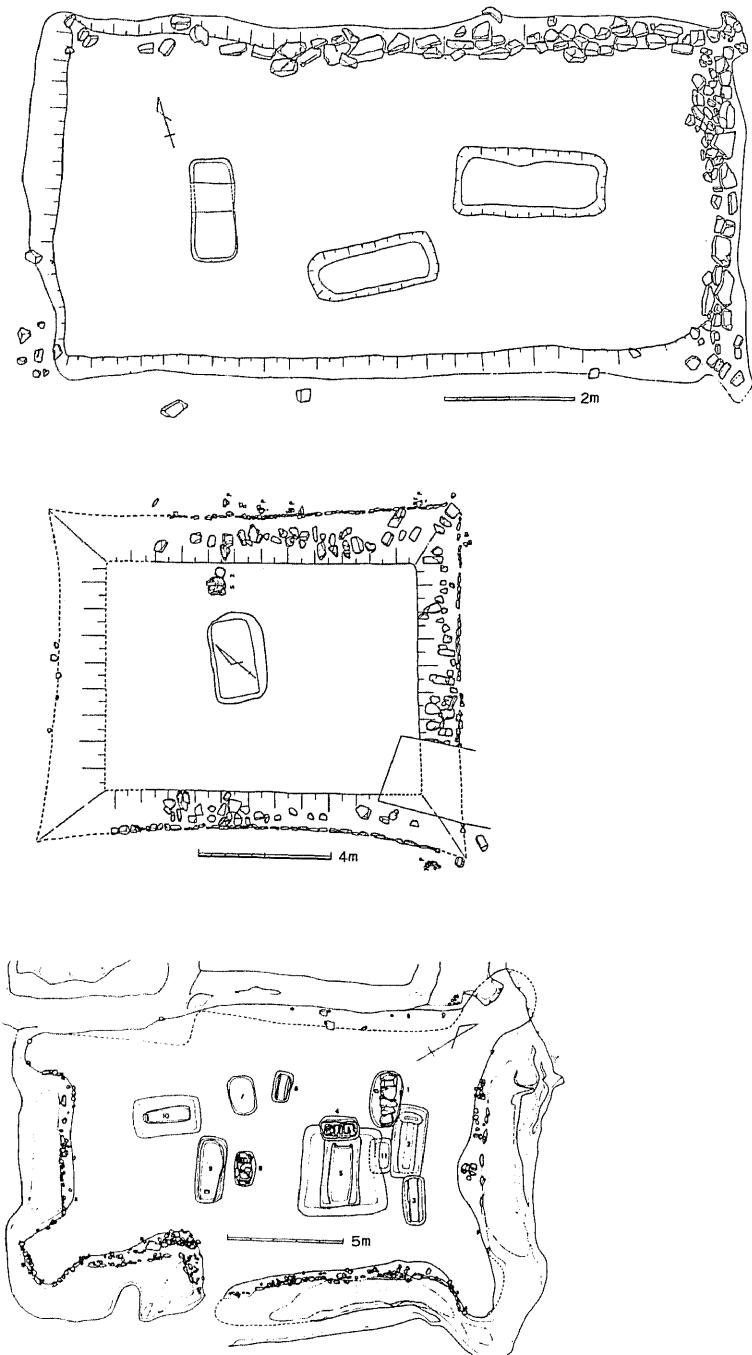


Fig. 37 備後発見の四隅突出型弥生墳丘墓

- (上) 宗祐池西1号墳丘墓(「宗祐池西遺跡現地説明会資料」1980年から)
- (中) 田尻山1号墳丘墓(向田裕始「田尻山古墳群」1978年から)
- (下) 矢谷墳丘墓(金井龜喜・小都隆編『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』1981年から)

土括墓三が発見されている。

周溝から、壺形および高坏形土器が発見されており、いずれも塩町式土器（三次地方弥生時代中期後葉）が出土している。

三次市矢谷墳丘墓は後にふれるようにやや後出であるため、ここでは除外するとして、上記三者に共通すところとして、①墳丘はいずれも低平で、②四隅が短小、③墳丘裾に溝状石列をもたない。の三点があげられる。これらの諸点は、仲仙寺墳丘墓群など四隅が発達し裾部に溝状石列構が形成されたものにくらべると、定型化以前、つまり、四隅突出墓の原初的形態とみることができ、その点、伴出土器の古さと矛盾しない。

これに対し、これまで山陰で四隅突出型弥生墳丘墓のうちでも古式と考えられているものに、
倉吉市阿弥大寺1・2・3号弥生墳丘墓、順庵原1号弥生墳丘墓がある。そのうち阿弥大寺1号墳丘墓の第3土壙墓に伴う土器は、九重遺跡3号土壙墓一括出土土器や米子市青木Ⅲ式、岡山でいうと鬼川市Ⅱ式に併行する（2、3号は直続してつくられているらしい）。また順庵原1号墳丘墓は、土器実測図が発表されていないが、報告者によると、「鍵尾Ⅰ式や的場式に相当するもの」と考えられているし、写真でみるとそのように思われる。したがって、「土器類については、まだ未整理のものが多く、ここで詳細にのべることができ難い」にしても、先の阿弥大寺1号よりもやや後出である可能性が強い。このほか松江市友田「貼石方形墓」といわれる四隅突出型墳丘墓がある。遺存する北辺で「約11mをはかり、周溝を設け、墳裾に貼石を施し、北西部の隅がやや突出する」という。但し、付近出土土器について「弥生時代後期後

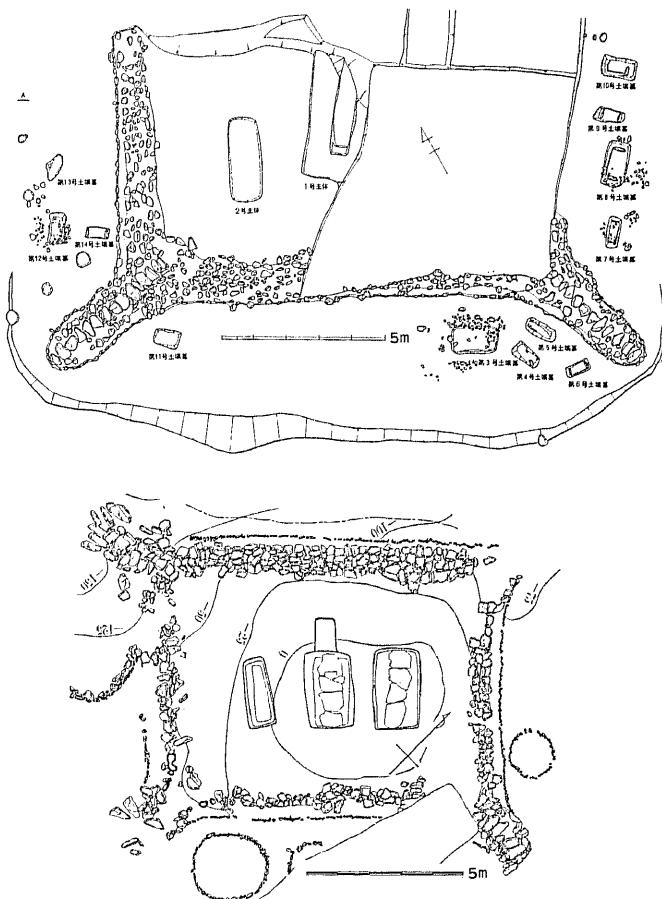


Fig. 38 (上)阿弥大寺1号弥生墳丘墓（真田広幸・森下哲哉『上米積遺跡発掘調査報告』Ⅱ1980年から)
(下)順庵原1号弥生墳丘墓（門脇俊彦「順庵原一号墳について」1971年から)

半頃」「後期の後葉」「弥生時代の終末期」など一定していないが、同報告書の挿図134図の4の壺形土器は順庵原1号墳丘墓のものに似る。

こうみてくると、備後および美作の上記三基の四隅突出型弥生墳丘墓はいずれも、現在山陰で最古式と考えられる四隅突出型墳丘墓よりも古いことになる。単に墳丘をもつ、あるいは丘陵上を整形したものであれば、より遡って山陰にも備後にも存在する。たとえば、山陰では「中期中葉頃から後期前半頃にかけて連続継起的に築造された」と推定される松江市友田墳丘墓群⁽⁷⁾、また備後では中期中～後葉に形成されたと推定される世羅郡甲山町近重山墳墓⁽⁸⁾がある。しかし、明確な四隅突出型墳丘墓となると、現状においては、上記のように山陰ではなく、その南側の地に認められるのはどういうことであろうか。

2

この問題にどうかかわるかはいま解決困難であるが、四隅突出型墳丘墓をほうふつとさせる1例を播磨に、また多少とも可能性のある1例を美作津山市に指摘しよう。播磨の例は加西郡

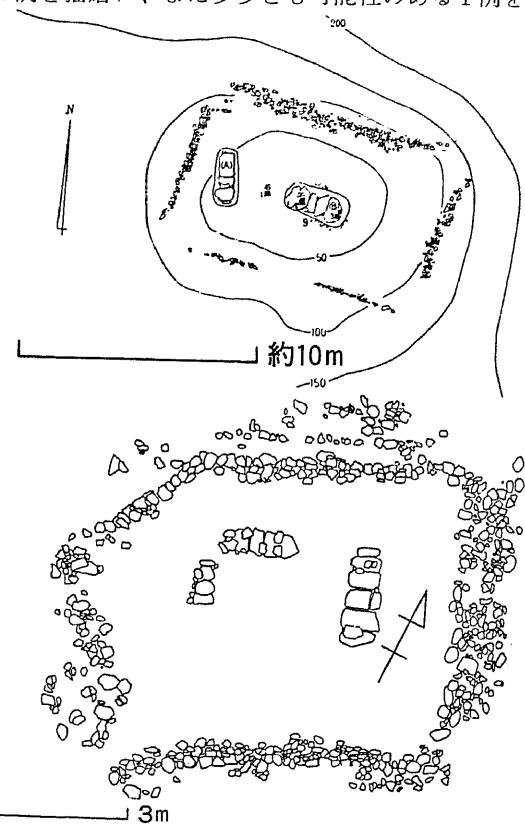


Fig. 39 (上)播磨周編寺山墳墓（赤松啓介「加西郡加西町周編寺山発掘概報」から）
(下)美作門の山1号墳墓（近藤義郎・中島寿雄「門の山第1号墳発掘調査報告」1952年から）

⁽⁹⁾ 加西町「周遍寺山第一号古墳」で、1957年、赤松啓介氏を指導者として発掘された。山頂に並ぶ3基のうちの東方の一基で、東北9.5m、南北6mほどの長方形をなす「石垣」をもつ。記述にはふれられていないが、図面をみると、それぞれの辺が反りをもち、各隅が突出することはまちがいない。それは先の庄原市田尻山1号四隅突出型墳丘墓の形状に似る。隅部はいずれも「石垣」を欠いているので、詳細は不明であるが、突出部はさほど長大とは思えない。墳丘は高さ1m前後である。内部主体は2つ発見され、墳長軸に平行して中心に位置を占めるものは、内法長1.7m、同幅34cm、同深さ24cmの組合せ箱式石棺で、棺底は下から粘土・朱・粘土・朱・バラスと重っていたという。遺体は成人男子2体、副葬品は刀子1本と管玉1個のみである。他の一棺

は長軸を南北にとる内法長1.58m、同幅30cm、同深さ20cmほどの組合せ箱式石棺で、若い女性人骨1体がみられたが、副葬品はない。また墳丘には、「何の装飾もなかったようで、埴輪その他の遺物を検出しなかった」という。年代について赤松氏は古墳時代「後期初頭」と推定されているが、実は年代を具体的に示すものはない。

また美作の1例は、1951年、筆者等によって発掘された津山市佐良山「門の山1号墳」で、⁽¹⁰⁾ 当時、「野球のベースを想像させる五角形」の古墳として報告されたものである。最大長約11m、短辺約8m、高1m未満で、人頭大ないしその二倍程の大きさの、河原石を主とした葺石が70cmから1.3mの「巾をもって、墳斜面に帯状にめぐらされていた。」内部主体は大小の組合せ箱式石棺3で、いずれにも副葬品は皆無であったが、墳中央の墳表近く、A石室の蓋石直下、A石室付近封土内、BおよびC石室内、西北隅の葺石上などから、土器小片が発見された。多くは小片で形態も推定できないが、1片（西北隅葺石上出土）は中央に焼成後とおもわれる穿孔をもつ径約6cm未満の平底片で、当時「むしろ弥生式土器に、普通見出される類に近い」と考えたものである。また他の1片（B石室付近出土）は長約6cmほどの破片で、当時気付かれなかつたが3cmの間に5本の凹線をもつ器台形と思われるもので、これまた中期弥生式土器片とみて差支えない。問題は、葺石であつて、その五つの隅のうち、1つに突出の傾向がみられることである。先の周編寺山のようには辺が湾曲していないので、確かなことは判らないが、実測図及び写真によってあらためて判断すると南西隅において突出の可能性が高い。それに対して北西隅は突出しないことがほぼ確かである。北東隅および北西隅も突出の可能性は少ない。したがつて、この「門の山1号墳」の南西隅に突出をみとめるしたら、一隅突出の五角形という前代未聞の形態となる。ありえないことではないが、やはり類例をまちたいので、ここではこれ以上ふれない。

さて、兵庫県加西町といえば、山陰はおろか、備後、美作からもかけはなれた播磨東部の地である。したがつてこれを四隅突出型弥生墳丘墓とみとめると、問題はますます複雑になろう。管玉や刀子から年代を確定することは現状ではほとんど絶望的であるし、四隅突出型の可能性はきわめて高いにせよなお、突出部分の「石垣」が全く残存していないので、やはり、これも、問題を将来に残したほうがよいかもしない。ただ、これが、その形態が示唆するように、四隅突出型墳丘墓の原初型式のひとつとすれば、山陰においてそれが盛行する時期にはこの地では、美作と同じように衰退あるいは消失していたと考えるほかないし、また単に隅を外方に突出させて出入路をつくるという在り方が、方形周溝墓の陸橋のように、多分に多元的に成立したと考えれば、この周編寺山をここでいう四隅突出型墳丘墓と関連させてかならずしも考える必要はなく、たまたま周編寺山で出現した隅突出の形態がこの地で持続しなかつたと考えればよいことになろう。

このような次第で現状では何といつても、四隅突出型弥生墳丘墓の源流を考える場合、備後

と美作が何よりも注意されてよい。

先のような状況から考えると、四隅突出型弥生墳丘墓の成立は、まず備後・美作に、ついで山陰方面に及んだということになるが、分布の実態は発見の現状であり、常に不安定であることを考慮に入れると、備後・美作などをふくめた中国山地以北が成立の地であったと考えておいたほうがよい。このような比定さえも、かなり重要な問題をもたらすことになる。山陰弥生墓制の特色とされる四隅突出型墳丘墓の成立地に、吉備の北部がふくまれるという重大な問題である。しかも四隅突出型の盛行期つまり鍵尾式に併行する時期には、美作では発見皆無、備後では、三次市矢谷墳丘墓1基がやや異様な形態をもって存在することが知られているのみである。

さて宗祐池西第1号、竹田8号などが示す四隅突出型墳丘墓の成立期には、吉備に特有となってくる特殊器台形・特殊壺形土器はまだ出現していない。そのため「吉備的」なものを考古資料の中で捉えることは困難である。ただこの時期には、備中、備前、備後南部、美作などと、備後北部、出雲、伯耆、石見などの間に、土器の上で、若干の相違を示す。これをもって直ちに前者が「吉備」の範囲を示すかとなると、何ともいえないし、土器の型式圏が即同族ないし擬制的同族関係、あるいは政治的関係を示すかどうかは速断の限りでない。

それに対して、次の時期、四隅突出型の盛行期になると、備中南部を中心に特殊器台形・壺形土器が成立し、備前、美作、備後にも波及するようになる。この時期にも、土器の地域色は備中南部・備前・備後南部 / 美作 / 備後北部・備中北部などにみられるが、そうした小差をこえて、特殊器台形・壺形土器はひろがっているので、広範な部族の連合は、そうした土器の示す地域差をこえたものであることは明らかである。また四隅突出型墳丘墓の盛行地域の内に、出雲・石見・伯耆西部 / 伯耆東部 / 因幡などの土器形式の微細な地域色が指摘されることも、上と同様のことを示す。

このような諸点から考えると、はじめ弥生時代後期初頭に備後やおそらく山陰の一部とともに四隅突出型墳丘墓を成立させあるいは受容した美作、少なくともその西部の集団は、後期中葉に成立または成立を開始した特殊器台形・壺形土器による埋葬祭祀の共通性が示す吉備的諸関係の中に参入し、同族的連合関係においては、南の地、おそらく備中南部に加わったとみえる。美作における特殊器台形・壺形土器の出土遺跡の数は、7遺跡にのぼるが、その多くが墳丘を伴わない集団墓地の一角におかれていることは、備中南部を中心とする連合に加わりながらも、その占める位置の低かったことを暗示している。

それに対して備後は、特殊器台の盛行期に、矢谷四隅突出型墳丘墓が築造されている。⁽¹¹⁾ しかもそれに特殊器台形・壺形土器が伴出する。しかし、この墳丘墓の形狀は、この時期に山陰の四隅突出型弥生墳丘墓ではひろくみられる墳端の石列からなる溝状遺構がみとめられず、また方形の主丘にもう一つの方形を付設するという先に「異様」と表現した平面形をもっている点

で、山陰の四隅突出型の「変形」ともいえるものである。このことから考えると、備後の少くとも三次付近では、墳形を山陰と「共有」し、同時に吉備特有の特殊器台形・壺形土器をもつという、陰陽に対して特異なかかわり方をしていたと考えることができる。

さて現状において、築造年代のもっとも遡る四隅突出型弥生墳丘墓は、すでにふれた三次市宗祐池西第1号墳丘墓、ついで鏡野町竹田8号墳丘墓、庄原市田尻山1号墳丘墓、さらに倉吉市阿弥大寺1号墳丘墓、瑞穂町順庵原1号墳丘墓、また多少問題はあるが松江市友田「貼石方形墓」ということになろう。それを突出部の構造の変遷でみると、（1）隅の突出の微小なもの〔宗祐池西第1号、竹田8号、田尻山1号〕から、（2）突出部が細長くつきでるもの〔阿弥大寺1号、順庵原1号〕へ、ついで（3）突出部がしゃもじ形に拡大するもの〔仲仙寺⁽¹²⁾9号、宮山⁽¹³⁾IV号〕となる。最後者については、突出部が拡大していく二、三の過程を指摘できる（41図参照）。

また、盛行期の四隅突出型墳丘墓にみられる溝状石列についてみると、（1）の宗祐池西第1号と竹田8号では斜面貼石以外の墳裾石列はみとめられない。田尻山1号になって斜面貼石の外辺に小形の角礫からなる石列があらわれ、（2）の段階で斜面貼石から数10cmほど離れて円礫の石列がめぐるようになる。しかしこの段階でも突出部端において石列と貼り石ないし突端への置き石との間隔はいちぢるしく狭くなり、ほとんど接するほどである。このことは、突出部端が他の部分と区別して意識されていたことを示し、それが墳頂への接近の路であるとする推定を確かなものとする一つの証拠である。ついで（3）の段階では、突出部端をふくめ石列と貼石との間に敷石がおかれ、それが段差をもつ二列となるものも少なくない。そのうち、敷石が一列のもの（仲仙寺9号、宮山IV号など）、二、三列のもの（安養寺3号）などがあるが、変遷差とは思われない。貼石の配置の仕方については、脱落ないし崩壊しているものがしばしばであるため、その変遷についてはここではふれない。

墳丘の規模については、（1）（2）は大差なく次表の通りであるが、（3）になって急速に増大するものが現われ、また不均等が拡大する。

以上のことから、四隅突出型の変遷は、隔絶の形式的整備の進行過程である。このことは、墳頂への接近の路としての突出部に対する墳裾石列の関係においてもっともよく観察できる。

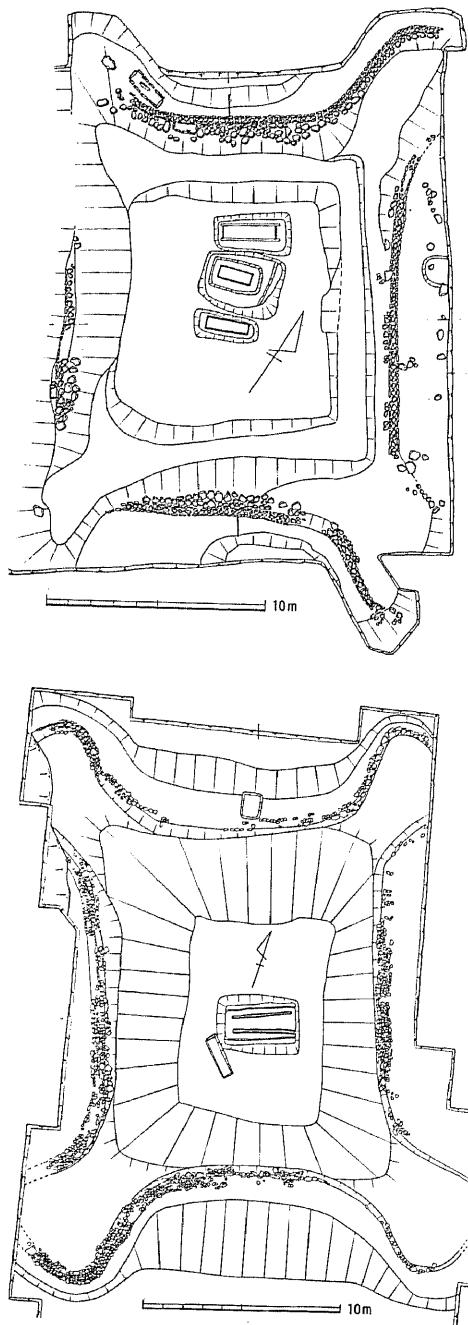


Fig. 40 (上) 仲仙寺9号四隅突出型
弥生墳丘墓

(下) 宮山IV号四隅突出型
弥生墳丘墓

(単位m)	
(1) 宗祐池西1号	10.0×5.0
田尻山1号	10.9×9.6
竹田8号	14.0×?
(2) 阿弥大寺1号	13.6×?
阿弥大寺2号	6.4×?
阿弥大寺3号	6.2×?
順庵原1号	10.75×8.25
友田「貼石方形墓」	10.5×?
(3) 宮山IV号	18×15
仲仙寺9号	18×15
仲仙寺10号	18×18
安養寺1号 ⁽¹⁴⁾	20×16
安養寺3号 ⁽¹⁵⁾	23~
西谷2号	15×?
西谷3号	37×27
西谷4号	32×26
西谷6号	17×?
西谷9号	38×30

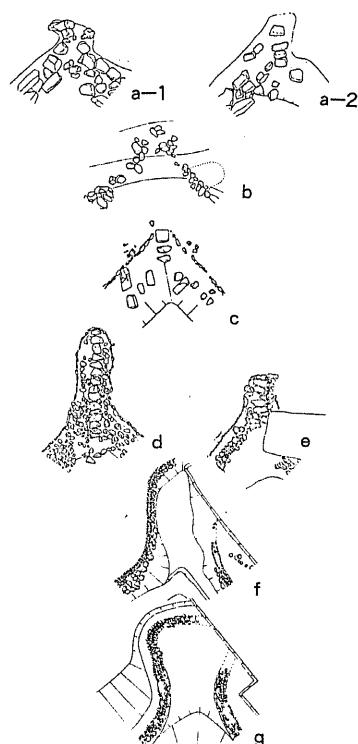


Fig. 41. 四隅突出型弥生墳丘墓の突出部の変遷

- a . 宗祐池西1号 b . 竹田8号
- c . 田尻山1号 d . 阿弥大寺1号
- e . 順庵原1号 f . 仲仙寺9号
- g . 宮山IV号 (各報告書から)

注

- (1) そうした中には、加藤光臣氏は矢谷墳丘墓の「まとめ」に当り、「在地的墓制の伝統を踏襲するとともに、山陰地域との密接な関連性も示唆するものである」と述べ、また宗祐池西1号墳丘墓に関し、「三次盆地においてはすでに弥生中期末～後期前半には四隅突出型の初現形態ともいべき方形墓が出現……同時に弥生後期を通じて山陰地域の墓制とも密接な関連性が維持された」とされ、「在地の伝統」を強調する卓見を披瀝している。
- (2) 向田裕始「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- (3) 「宗祐池西遺跡現地説明会資料」1980年
- (4) 真田広幸・森下哲哉『上米積遺跡発掘調査報告Ⅱ』1980年
- (5) 門脇俊彦「順庵原一号墳について」『島根県文化財調査報告』第7集 1971年
- (6) 岡崎雄二郎・中尾秀信・佐々木稔「友田遺跡」『松江圏都市計画事業乃木地区土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年
- (7) 注(6)と同じ。
- (8) 潮見浩ほか「藤が迫遺跡群」『広島県文化財調査報告』第9集 1971年
- (9) 赤松啓介「加西郡加西町周編寺山古墳発掘概報」1958年頃（発行年月日なし）
- (10) 近藤義郎・中島寿雄「門の山第1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』1952年
- (11) 金井亀喜・小都隆編『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』1981年
- (12) 近藤正『仲仙寺古墳群』1972年
- (13) 近藤正・前島己基ほか『宮山古墳群』1974年
- (14) 勝部昭「安来・安養寺古墳群」『菅田考古』1976年
- (15) 出雲考古学研究会『西谷墳墓群』1980年